



上／トロッコ軌道跡 下／神子畑(みこばた)選鉱場跡

朝来市＝竹田城跡ではなく、さまざまな市民たちが現在進行形で暮らし働いているまちだということをプロモーションしていきたい。

05年4つの町が合併し朝来市が誕生したが、人口はこの5年で約2000人減少し、現在3万1400人。高校卒業と同時に進学・就職でまちを出る若者が

多く、高齢化・人口減少は切実な問題だ。

まちへの誇りと愛着

「住み続けたい」「戻って来たい」と思えるまちであるには何が必要か――朝来市は16年3月「シビックプライドの醸成」を前面に掲げた「朝来市シティプロモーション戦略」を策定した。

シビックプライドとは、まちへの誇りや愛着、まちの一員としてこのまちをより良くするという当事者意識に基づく自負心を指す。

朝来市に限らず、自分のまちの良さを、市民が十分に知っていることは少ない。「どんなまち？」と聞かれても「何もないよ」とか「フツー」としか答えられない。まちの良さを知らず、関わりも薄いから、外へ出ていってしまふ。自分のまちの魅力を知り、語れる人が多いまちは、外から来た人にとっても魅力的に映るはず。「自分ごと」としてまちを語れる人を増やすのが重要、とのことだ。

あなたはまちの未来

朝来市の戦略では、特にまちの未来を担う若者世代に向けて、まちを知り、好きになり、まちのために自分も何かしたいという気持ちを高めるところまで、段階的に

シビックプライドを育んでいく。

「あなたはまちの未来ASAGOING」には、朝来市の未来を創るのは、ほかでもないあなたなのだ、というメッセージが込められている。

活動は大きく3つ。①「個人の一步を伝える」＝市の広報誌やフリーペーパー、ポータルサイトで未来を担う20代から40代の個人の活動を取り上げ②「地域と人をつなぐ」＝情報を提供し、朝来市で何かやってみたい人を応援する体制をつくる③「活動や学びの



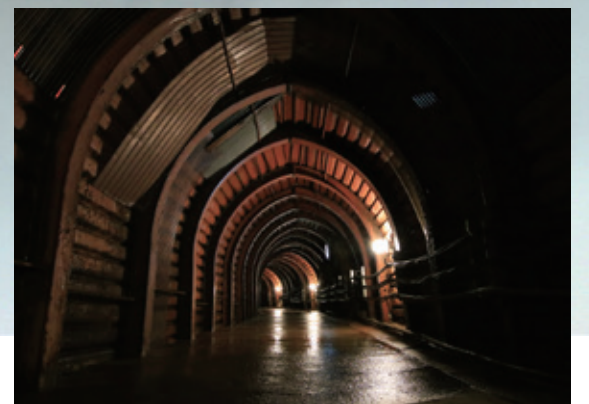
朝来市のシティプロモーション・コンセプトブック



旬 発 N I P P O N

シビックプライドを育む

――朝来市のシティプロモーション



生野銀山

竹田城跡に頼らない

雲海に浮かぶ竹田城跡。幻想的な風景が話題になり、「天空の城」として一躍名を馳せた。その竹田城跡のある朝来市がシティプロモーションを展開していると聞き、早速取材を申し込み、市の若手3人が応えてくれたわけだが、開口一番「私たちは竹田城跡に頼らないプロモーションをめざしています」。メディアでは竹田城跡のビジュアルイメージだけが一人歩き。

天空の城・竹田城跡、日本遺産認定をめざす生野銀山などを擁し、「住みたい田舎」としての人気も上昇中の兵庫県朝来市。2016年3月策定の「朝来市シティプロモーション戦略」をもとに、「シビックプライド」醸成をめざした活動を展開している。

朝来市総合政策課の橋本大地さん、足立美香さん、観光交流課・地域おこし協力隊の篠原諒太さんに話を聞いた。

場づくり」＝コミュニケーション
拠点「ASAGOingカフェ」
の活動だ。

「場」づくりを考える

もともと朝来市には、観光で訪れた人がまちの人と触れ合う「場」や、魅力を知ってもらう「場」がないという課題があった。そこで、来訪者と生活者が出会う場、まちの情報を提供する場、さらには市民が気軽に立ち寄ってまちの活動に触れられる場、といった機能を兼ね備えた拠点づくりをめざしている。但し、先にハードを整備するのではない。どんな場にすればいいか、それを考えるところから市民が参加する。その過程も含め

ての場づくりだ、と橋本さん。

「人ひとりが担い手

実は朝来市では戦略策定以前から、みんなでまちの未来を語り合う「まちづくりカフェ」を3年間実施。昨年からもう少し専門的にコミュニケーションなどにつなげる学びの場「Asago Labo」として展開。これらの活動には比較的意识の高い市民が集まったが、今度のカフェでは、「興味はあるけれど日々の生活に追われて」「何をすればいいかわからない」という人を引っ張り出し、「自分にも何かできるかも」という意識変化を促したい。シティブロモーション推進の主役は、あく



上／まちづくりカフェ 下／Asago Labo

若い仕掛け人たち

までも一人ひとりの「人」だから、と足立さんは言う。

行政の仕事とえば「縦割り行政」「お役所仕事」ということが批判とともに語られがち。しかしここではシティブロモーションのメインの旗振り役を総合政策課が担い、あさご暮らし応援課は人材育成や移住者の交流の場づくり、観光交流課はまち歩きマップをつくって魅力を発信する、秘書広報課ではポータルサイトを起ち上げ、きめ細かな情報を発信する、など



ASAGOingカフェ



左から 朝来市の橋本大地さん、足立美香さん、篠原諒太さん

それぞれの持ち場で横断的に動いている。

なんと言っても仕掛け人たちが20〜30代と若い。篠原さんは総務省の地域支援制度・地域おこし協力隊として神戸から来て移住を決めた。若い人が減った地域に協力隊が入って活動を始めると、年配の人々も刺激を受け、地域が活性化する。若い人はまちの原動力になる。

シビックプライドの種を蒔く

人口減少に歯止めをかけ、21世紀半ばに人口2万5000人を維持すること、それが目標の一つ。ただ数字以上に大切なのは、そのとき朝来に住む人が、自分らしく暮らし、いきいきと活動していることだ。人気の観光資源を生かす「外向きの差別化」でなく、「内向きの主体化」をめざすシティブロモーション戦略は一見、遠回りにも思える。しかし一過性に終わりがちな観光客誘致でなく、まちの持続的発展を見据え担い手を育てる道を、朝来市は選んだ。今は、シビックプライドの種を蒔く。どんな芽を出し花を咲かせるのか、仕掛け人たちの眼差しに、未来への期待が膨らむ。

山陰随一の藤棚を誇る大町藤公園

